白梅学園大学・短期大学紀要　**48**：53～71（2012）

〔資　料〕

地域と大学の連携と世代間交流

── ジェンダーから見た交流の可能性 ──

草野　篤子*・井上　恵子**

キーワード　大学　地域　ジェンダー

はじめに

社会の急速な変動に伴う世界的な人口構成上，人口統計上の変化が起きている。子どもの貧困，高齢者の孤独死など現代の家族の変容，出生率の低下，高齢社会の進行，地域社会の結びつきに焦点を当てた政策研究，プログラム化など，地域や社会の福祉に貢献する研究が求められている。

地域社会における大学は，革新的なプログラム，研究，開発をとうして，現代社会が抱える諸問題に取り組む貴重な場を提供している。各大学によって，大学の目標や使命は異なっているが，どの大学においても，社会的公共の福祉に貢献するという考えは，共通しているであろう。高等教育機関である大学の存続や社会的評価は，その研究教育活動が，地域コミュニティーと相互互恵的関係を作り出し，結びつきを定着させているかにかかっているとオーストラリア･ビクトリア大学のテレンス･シーズマン（シーズマン 2007）は，述べている。地域に根づいた大学は，急速な家族，地域社会の変容に対応して，1. 少子高齢社会　2. 家族生活を変容させる社会変動　3. 都市化・過疎化，科学技術の進展が人間関係やコミュニケーションに与える影響　4. 社会の急速な変動に伴う人間疎外などの問題を解決する糸口を，社会に提供することが肝要である。

今回の論文では，世代間交流の必要性を認めている白梅学園大学が周辺コミュニティーとの協働を通じて，その知的資源や学生のパワーを公共の福祉の創造に，積極的に力を発揮していく可能性を，模索してみたい。大学が，コミュニティーでの活動を重視し，コミュニティー力やコミュニティー研究に持続的に取り組むことが，大学の質と，存在意義に重要な関連をもつと考えられるからである。

そしてそのことは従来から問われ続けてきたジェンダーのありようにも新たな視点を提供する。女性のとりわけ高齢期は，それまでの女性達の生活が集約的に現れる。国際婦人

＊子ども学部　家族・地域支援学科　＊＊教育・福祉研究センター嘱託研究員
Atsuko KUSANO，Keiko INOUE：The Collaborated Intergenerational Exchange between Communities and Universities：The Possibility of Interchange in the View of Gender

年を契機とした女性（婦人）問題の学習が国や地域，さらには家庭のあり方を多少なりとも変革してきたことは特に若い女性たちに恩恵を与えたが，高齢女性たちの有り様はまだ未解決な多くの問題を残し，ジェンダーのあり方を再確認させられる。2010年末に策定された「第3次男女共同参画計画」でも明らかなように，教育や福祉の視点からの対応が求められている。以下に小平市という1自治体に暮らす高齢女性たちの意識と生活実態を把握するとともに，大学に何ができるかを探ることとする。

Ⅰ　調査の目的

白梅学園大学周辺コミュニティーである小平市の，子ども，青年，中年世代，高齢者との持続的な協力・協働（ネットワーク化）を意図し，まずは小平市に居住する高齢者の生活実態を調べ，男女差に着目した現状分析をし，地域課題をジェンダーの視点から明らかにする。また地域の高齢クラブの会員が白梅学園大学に対して何を求め期待しているかについても，今回の調査で明らかにすることを意図して調査を行った。

Ⅱ　方　　法

2008年3月末から4月にかけて，小平市内の高齢クラブに所属する65歳以上の高齢者に自記式調査票への記入を依頼した。その方法としては，今回調査の趣旨を高齢クラブの月例会において説明し，各班の班長さんに質問紙をゆだね，班長さんが，高齢クラブ会員に記入を依頼し，記入された調査票を集め，宅急便で大学に返送するという方法をとった。近くに居住する班長さんの中には，直接大学に届けてくださった人もいた。小平市には35の班があり，各班の会員は，おおよそ10～15人である。

調査票の配布数は525票，回収数は511票（回収率97.5%），有効票503票（有効率95.8%）である。調査項目は　1記入者　2大学のイメージ　3キャンバス訪問の有無　4，5地域貢献　6生きがい　7してみたいこと　8大学の評価　9大学に感じていること　10住まい　11介護について　12性別と年齢　13世帯状況　14独居の有無　15介護者の希望　16収入　17収入額　18仕事　19住まい　20介護が必要になった時　21希望する住まい　22近所付き合い　23外出　24健康づくり介護予防　25悩みや不安　26相談相手　27保健福祉サービス　28高齢者が長寿を喜び会える地域社会を築くために重要な施策　の順である。まずは単純集計をおこない，さらにクロス集計により，男女差についてx^2乗検定を行い有意差があるものを分析し，自由度については（　）内に記載した。nは各設問への回答者数であり，無回答はnaで表示するか含めていない。

以下，図表は実数と割合で示し，分析では属性について実数と割合で示している。

Ⅲ　結　　果

本調査の回答者について男性は145人（31.3%），女性は319人（68.7%）である（図1）。年齢構成では70歳代が多く（前半32.3%，後半27.5%），次いで60歳代後半，80歳代，90歳代の順となる（図2）。

以下に小平市高齢クラブの人々の生活状況，意識，男女差，大学への期待等についてまとめることとする。

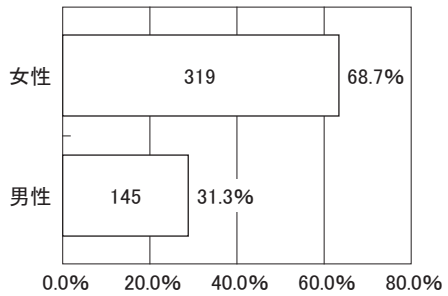

図1　性別　n＝464

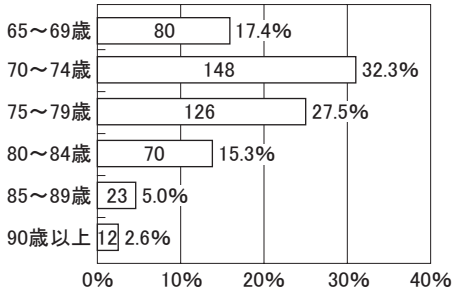

図2　年齢区分　n＝459

1　小平市内の高齢クラブ会員の生活と意識

（1）属性と交流

本調査では介護認定の申請をしていないが272人（80%）に及び，住居は自宅が440人(99.5%)と大半を占める(図3，図4)。また，世帯の状況は夫婦のみが合計213人(45.9%)，単身世帯は85人（18.3%），二世帯が合計87人（18.8%）である（図5）。一人きりになることが「時々ある」は217人（46.8%），「ほとんどない」は155人（33.4%），「いつも一人」は80人（17.2%）であり，合計372人（80.2%）は人と何らかのつながりがあることがわかる（図6）。

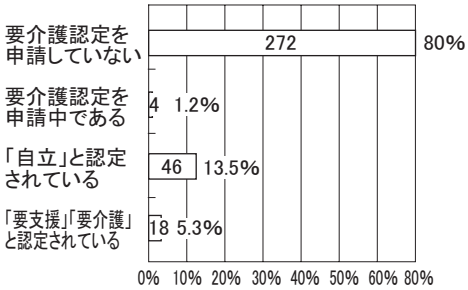

図3　要介護認定を受けているか　n＝340

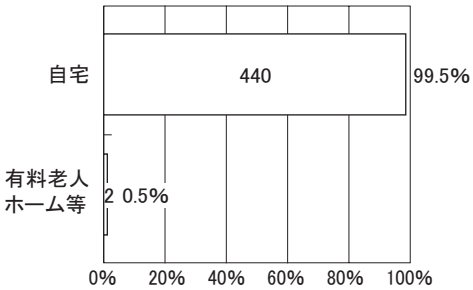

図4　今どこで生活しているか　n＝442

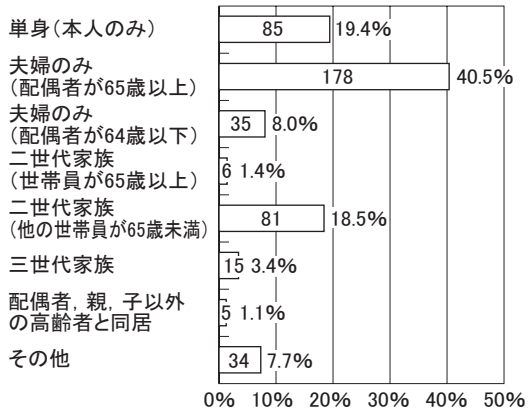

図5 世帯状況 n＝439

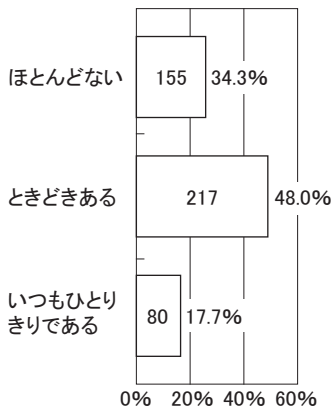

図6 1人きりになることの有無 n＝452

次に，男女別に世帯状況をみると，どちらも夫婦のみの世帯が65歳以上と未満を合わせて（男性94人，女性119人）多いが，二世代は男性25人（18.3%）女性62人（20.5%）と少なく，単身世帯をみると女性では80人（26.5%）にもなる（図7 x^2（7）値＝46.135, p＜.01）。一人きりの有無について男女別にみると，一人になることについて「ほとんどない」「ときどき一人になる」の合計は男女とも半数以上だが，「いつも一人」の割合は女性76人（24.6%）男性5人（2.8%）である（図8 x^2（2）値＝31.890，p＜.01）。

しかし近所との付き合いをみると訪問し合う人がいる女性は169人（52.0%）に対して，男性は61人（43.9%）である。さらに約3割（男性39.6%，女性36.0%）の人が立ち話をする程度の人がいることがわかる（図9）。

次に話し相手について全体の集計をみると，家族・親戚を上げる人が384人（81.7%）おり，ついで友人，知人175人（37.8%），かかりつけの医者168人（35.7%）である（複数回答）。

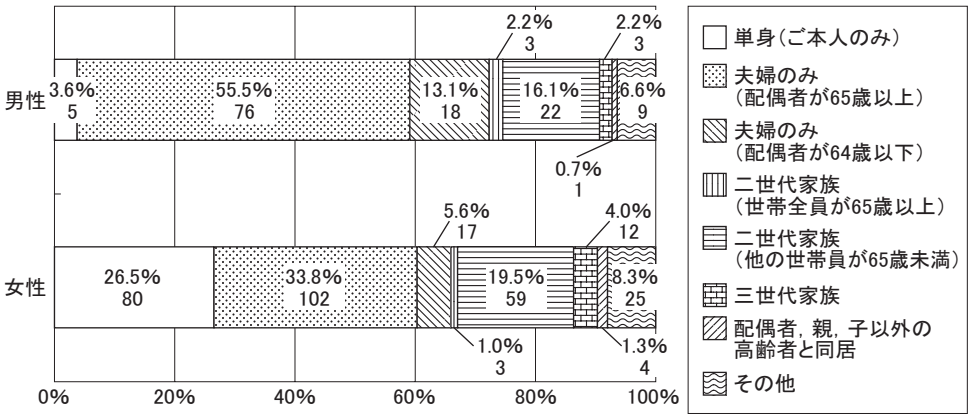

図7 男女別世帯状況について 男性 n＝137 女性 n＝302

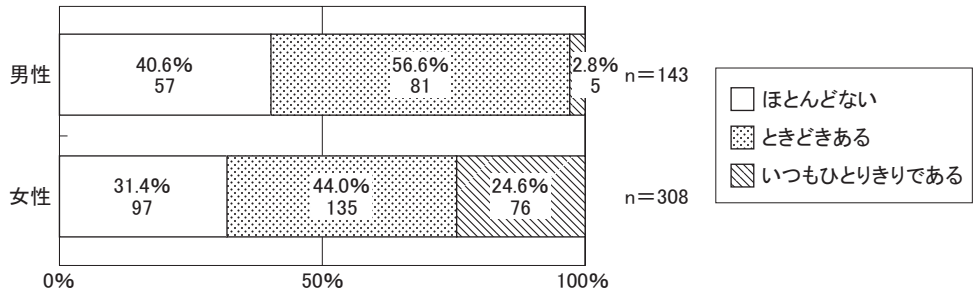

図8　男女別　一人きりの有無

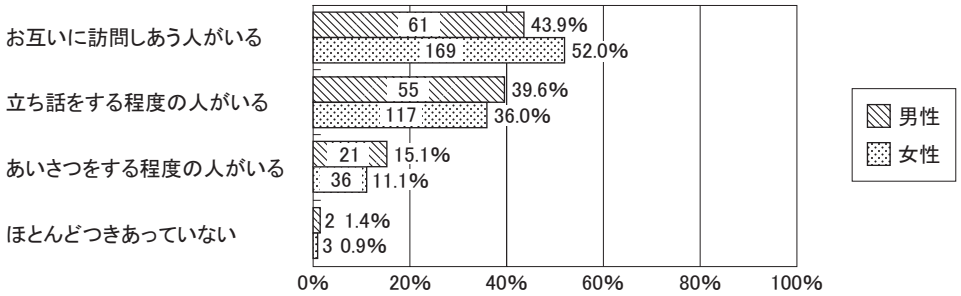

図9　男女別　ご近所付き合いについて　男性 n＝139　女性 n＝325

（2）年収と仕事

こうした生活を支える高齢者の収入はどのようになっているであろうか。全体の回答で年収をみると200～300万円（28.8％），100～200万円（24.8％），50～100万円（15.9％）300～400万（13.5％）の順で，50万円未満の人も5.9％いることがわかる（図10）。

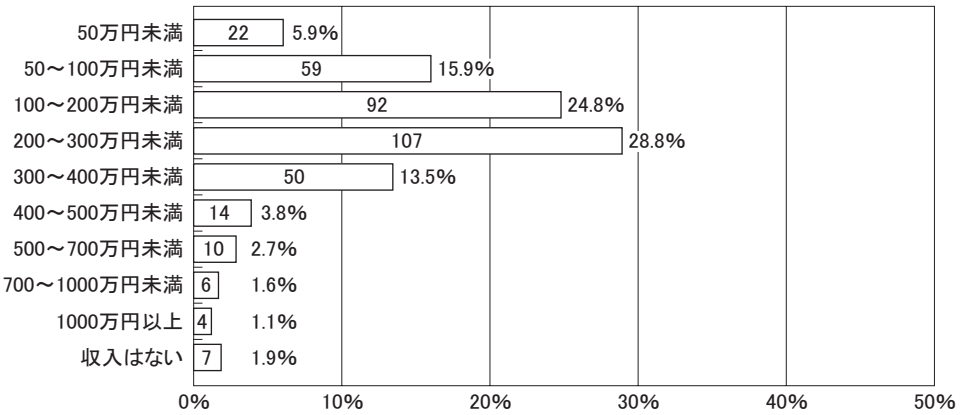

図10　昨年1年間の収入額　n＝371

収入源についての全体集計では公的年金を75.6%の人が最初に挙げている。ついで預貯金の割合が多く，続いて私的年金となる（図11）。また，会員全体で仕事をしていない人は82.5%，仕事をしている人は17.4%に過ぎない（図12）。

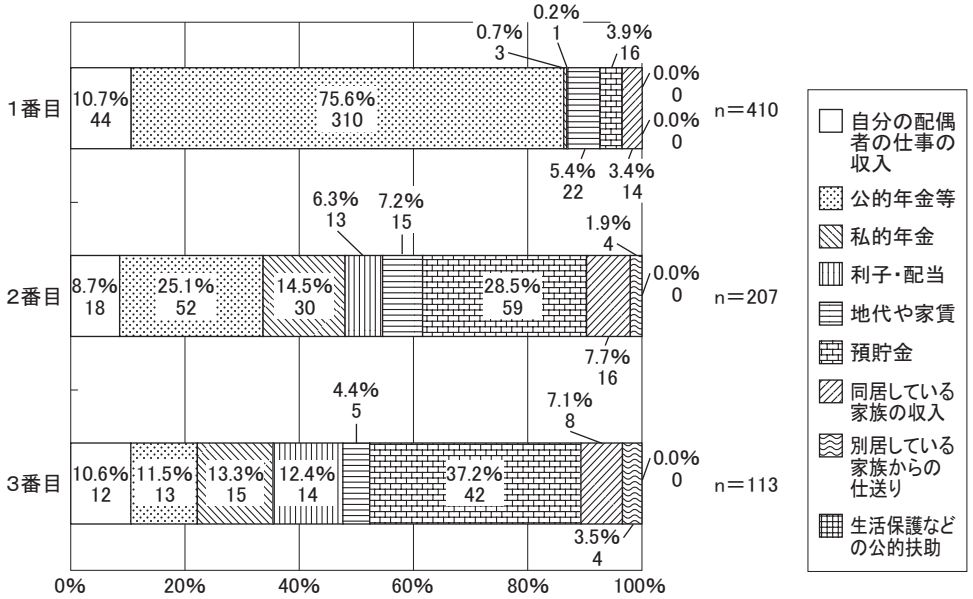

図11 生活を支えている収入

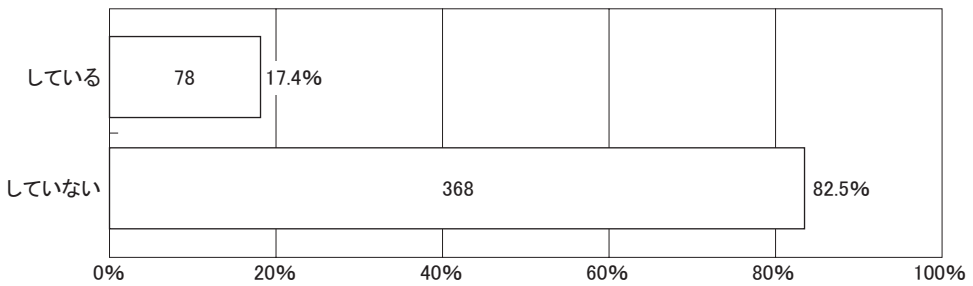

図12 現在収入が伴う仕事をしているか n＝446

仕事をする理由は多様である。生活費（25.8%）や健康のため（24.1%），ついで小遣いを得るため（18.1%）が多く，生活に張りあいが出るため（13.7%）等の理由が並ぶ（図13）。

そして就労者の雇用形態や仕事内容をみると自営業の手伝い（19.1%）やシルバー人材センター等（19.1%），非正規雇用（16.4%），商工自営業者（15.4%）が多く，常勤雇用者は10.7%にすぎないことがわかる（図14）。

男女別に仕事の有無をみると男性（77.3%）に比べ，女性の84.5%が収入を伴う仕事をしていない（図15 x^2（1）値＝3.154, .05＜p＜.10）。

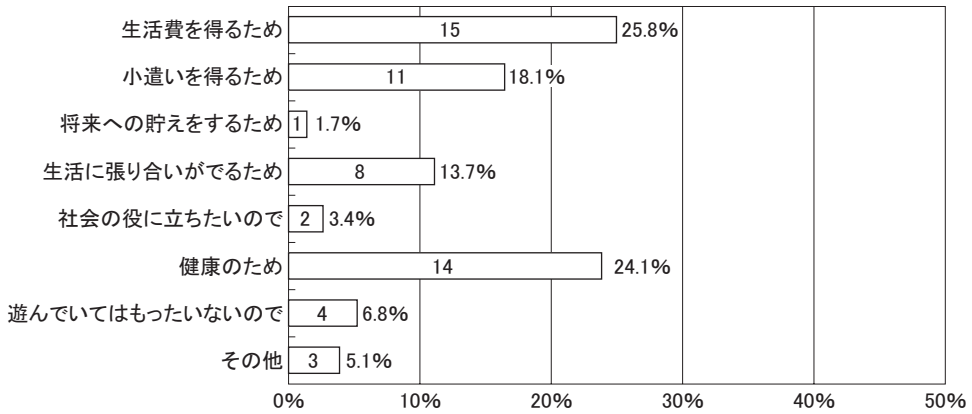

図13　仕事をしている主な理由　n＝58

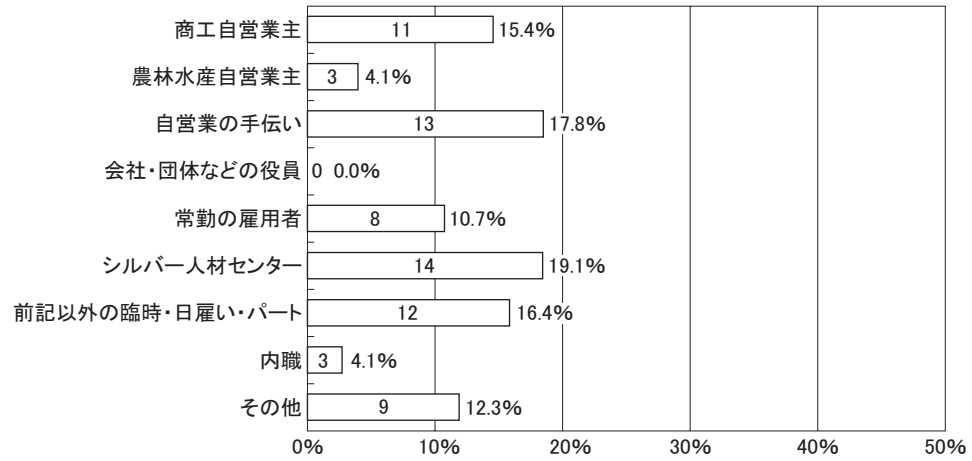

図14　仕事の種類　n＝73

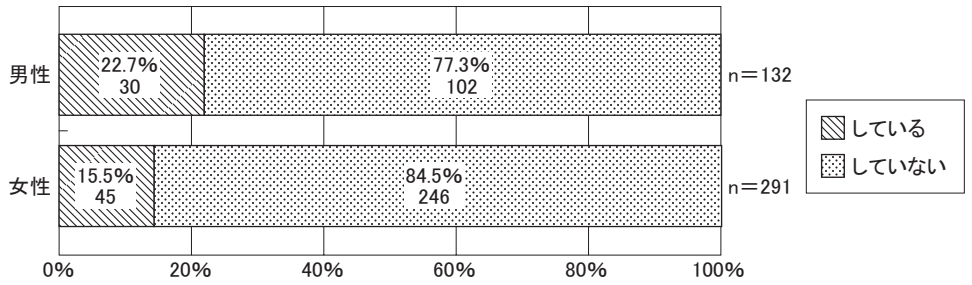

図15　収入源(仕事)の有無について

さらに男女別年間収入をみると年収200万から300万円台は男性（30.8%）女性（27.3%），300万から400万円台は男性（29.2%）女性（4.8%）というように，それ以上の年収も含めて男性の比率が高い。しかし，年収100万から200万では男性（16.7%）女性（29.4%），50万から100万では男性（5.0%）女性（20.8%）であり，50万円未満についても男性（1.7%）女性（8.7%）というように女性の比率が高い。つまり，200万円以下の年収については女性が58.9%を占め，男性（23.4%）と大差を示している（図16　x^2（9）＝80.998, p＜.01）。

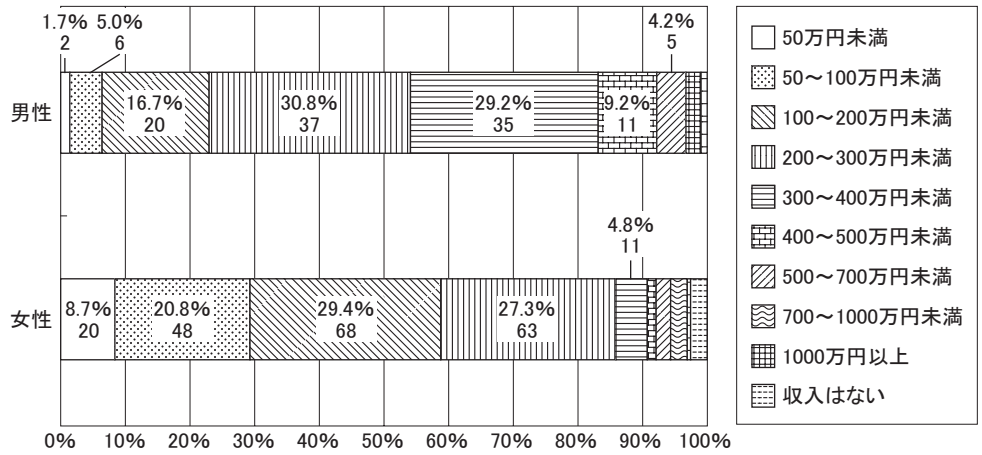

図16　男女別にみる昨年1年間の収入額（男性 n＝120　女性 n＝231）

（3）高齢者の介護への意識と生き方

高齢期には介護問題が切実なものとなる。介護状態となった時の生活を支援できる親族については，全体として「いない」人が23.1%，76.9%の人は「いる」としている（図17）。これを男女別にみると男性は「いない」とする人24.4%，女性は18.7%，「いる」とする人は男性75.6%，女性81.3%である（図18　x^2（1）値＝11.817, p＜01）。

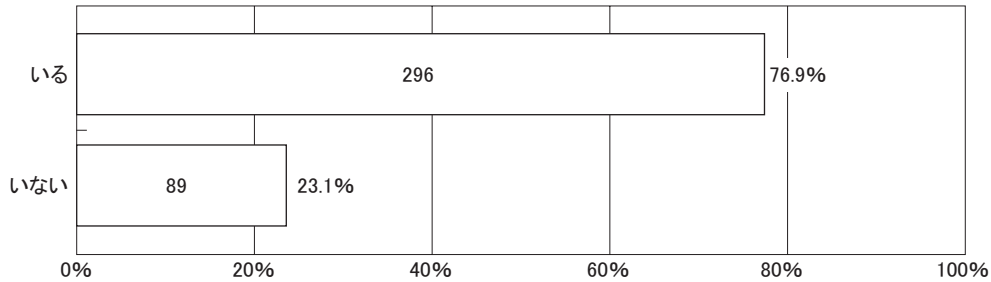

図17　支援してくれる親戚の有無　n＝385

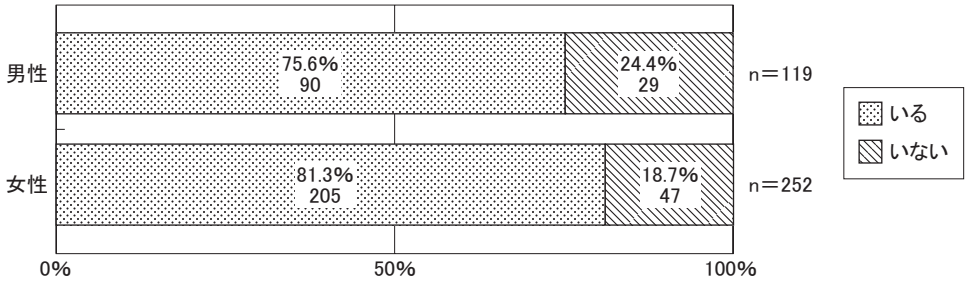

図18　男女別　支援してくれる親族の有無

支援親族と高齢クラブ会員の住居間の距離を全体と男女別に聞いたものが次の図である。

そのうち全体の68.3%（39.7%と28.6%の合計）の者が徒歩圏等比較的近くに住んでいる（図19）。男女差はほとんどない。

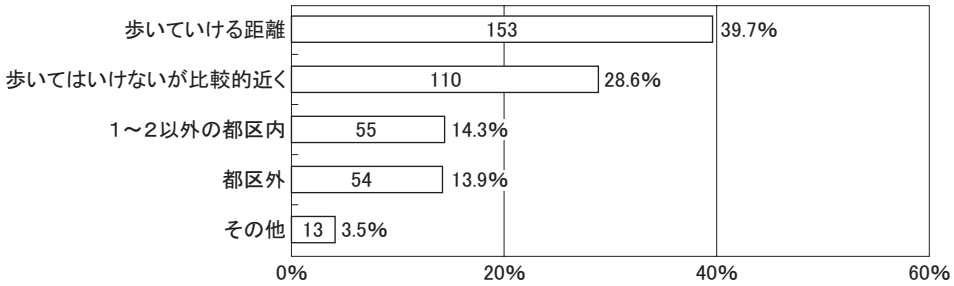

図19　一番近くにいる支援してくれる親族との距離　n＝385

また介護が必要になった時の介護者の希望は会員全体では配偶者（37.9％），娘（23.8％），ヘルパー（18.2％）等となり，嫁に期待する者は7.5％に過ぎない。

しかしこれを男女別にみると男性は69.8％もの人が配偶者に期待（女性は24.9％）するが，女性は29.7％が娘に期待（男性は9.5％）し，ついで配偶者（24.9％）である（図20）。

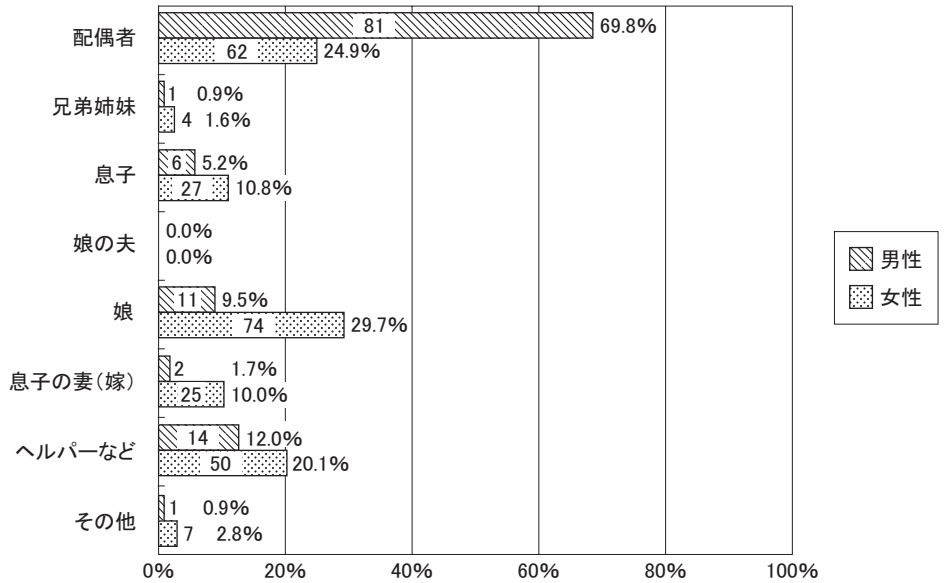

図20 男女別 介護者についての希望 男性 n＝117 女性 n＝249

そしてそれを可能にする同居者については，「いる」とする人が女性の81.7％，男性は65.5％である。（図21 x^2値＝11.817，p＜.01）。

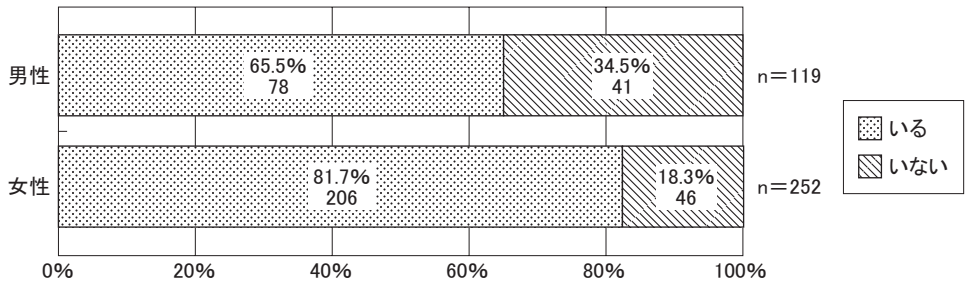

図21 男女別 同居者について

次にこれからの社会における理想の高齢者像については，高齢クラブ全体では介護予防が第一であり（55.9％），人生を生きがいのある充実したものにする（38.2％）ことをあげる人が多い（図22）。また男女別にみても同様の順であるが，女性では介護予防（58.9％），人生の充実（41.1％），社会へ目を向ける（23.5％）の順が男性では介護予防（54.5％），

人生の充実（37.9%），地域社会への貢献（31.7%）とより具体的になっている（図23）。

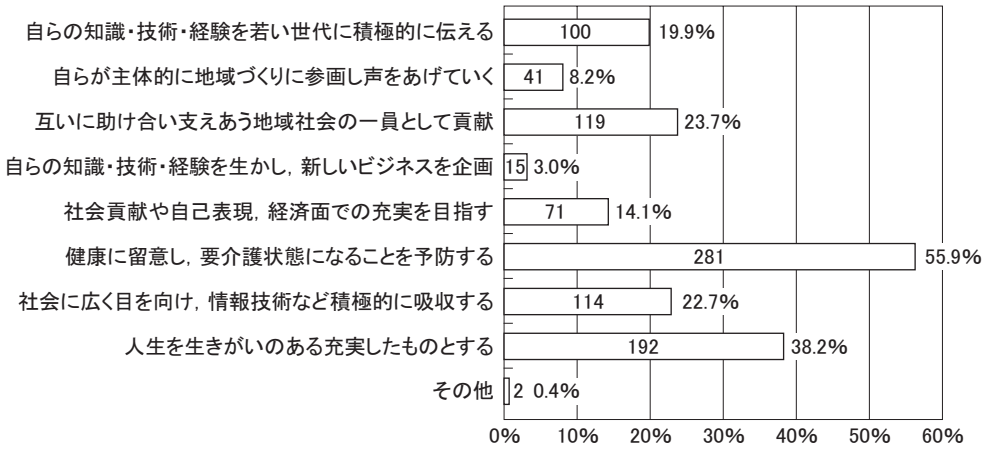

図22 これからの社会における理想の高齢者像 n＝503（複数回答）

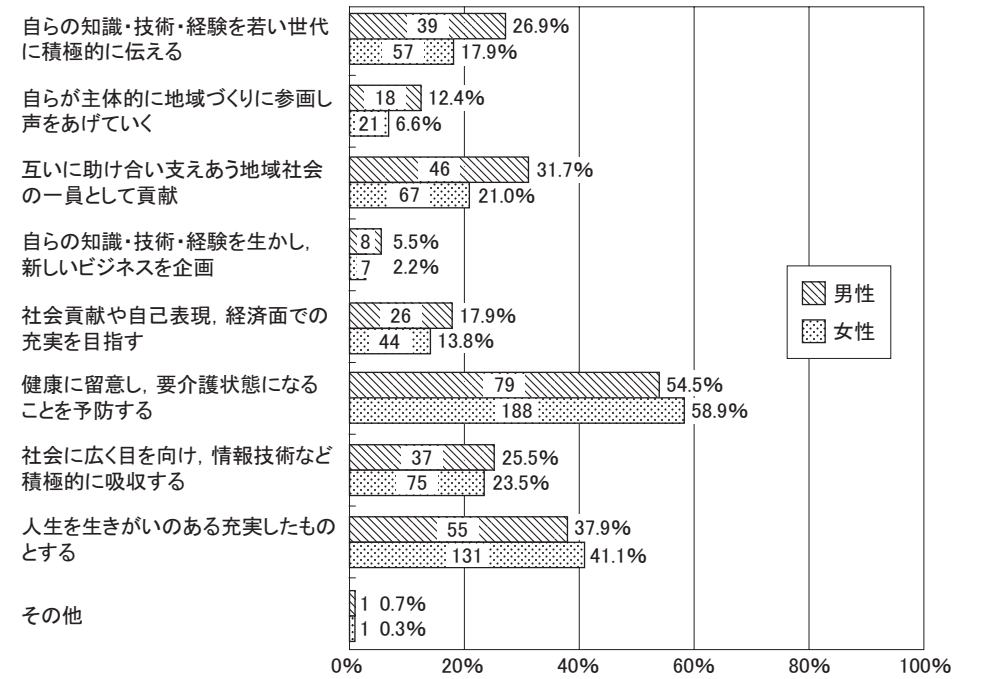

図23 男女別 これからの社会における理想の高齢者像 男性 n＝141 女性 n＝319（複数回答）

（4）高齢者関連施策等に望むこと

国や県・市町村に求める高齢者関係施策について全体では，健康診断，運動推進，介護予防事業の充実（30.8%），療養型病院や老人保健施設等，医療保健施設の整備（22.3%），在宅介護サービスの充実（17.7%），高齢クラブ活動の支援（17.1%）を期待している。

健康に気づかいつつ，人生を充実したものとすることを望み，身近な地域の一員として暮すことを望んでいることがわかる（図24）。

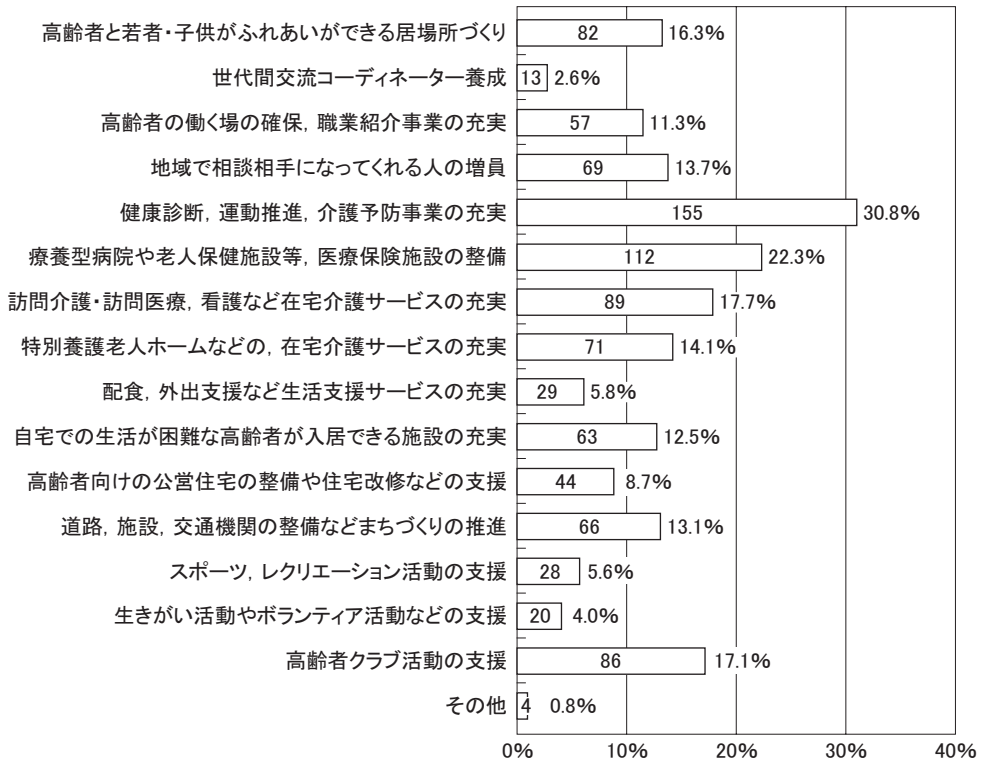

図24 国や県・市町村が高齢者関連施策への期待 n＝503（複数回答）

同様に男女別の意向もほぼ同様で，介護や医療の充実を望んでいる（図25）。

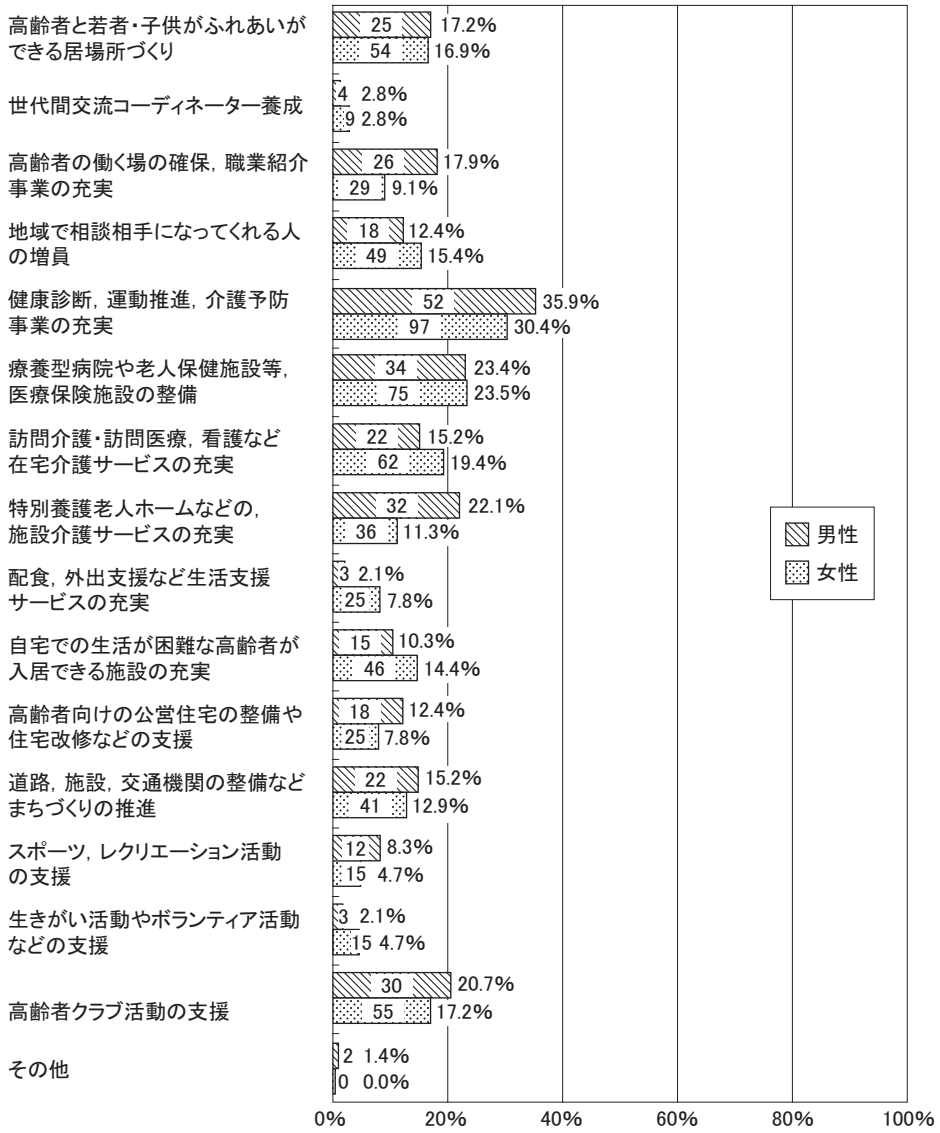

図25　男女別　高齢者施策に期待すること　男性 n＝145　女性 n＝319(複数回答)

この期待をさらに栄養改善事業と送迎サービスについての意識を聞いたのが次の図である。

健康問題については80.9％もの高齢女性が栄養改善事業へ関心を寄せ（図26　x^2（2）値＝24.002　p＜.01），送迎サービスの利用については男性59.6％，女性45.2％が必要なしとしている（図27　x^2（2）＝4.919，　.05＜p＜.10）。

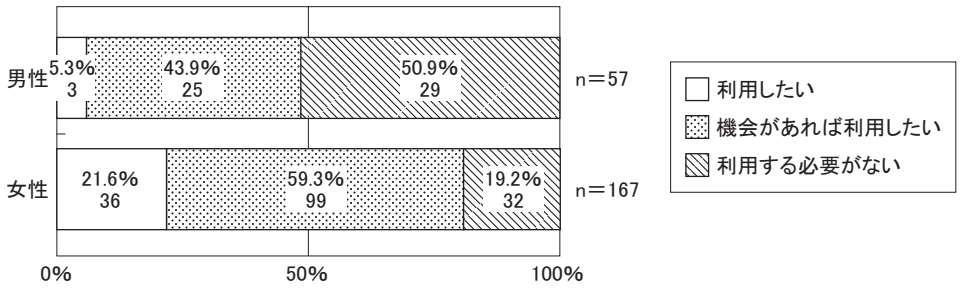

図26　料理教室などによる栄養改善事業

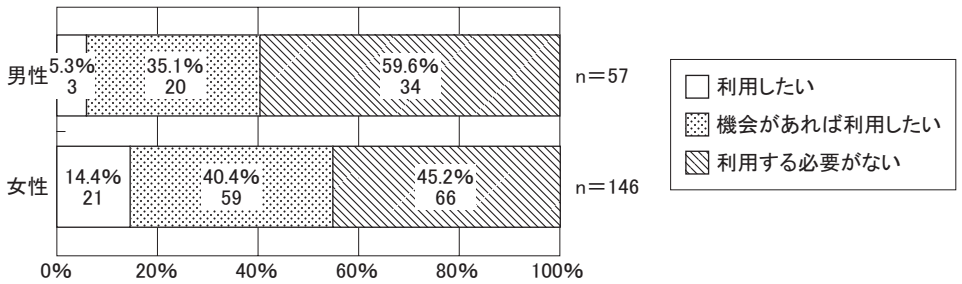

図27　送迎サービス

さらに高齢クラブへの支援や交流を求める高齢者の意識から世代間交流コーディネーターの養成についてみると，「機会があれば利用したい」と女性では70.2％，男性では54.4％の人が無理のない形での利用を望んでおり，「ぜひ利用したい」（男性7.0％，女性5.7％）人を含めれば6～7割の人が望んでいることがわかる（図28　x^2（2）値＝4.680，.05＜p＜.10）。

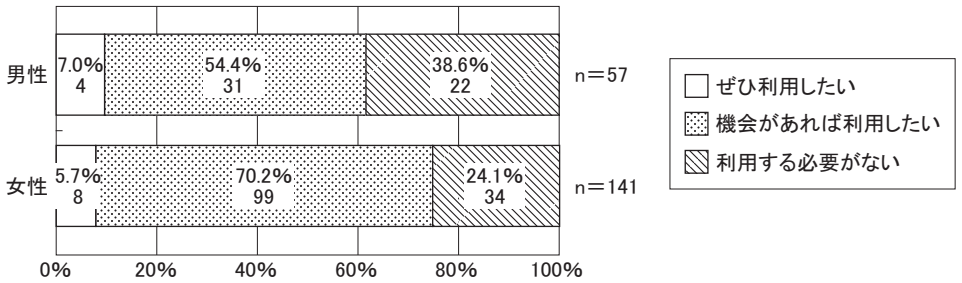

図28「世代交流コーディネーター」の養成

2　白梅学園大学のイメージと男女差

白梅学園大学に対するイメージを聞いたものが次の質問である。男女別に4評価（評価1は評価が低い～評価4は評価が高い）を見ると「地域の保育や福祉，介護に役立つ知識等を提供するところ」の項目では男女ともに「3」を選択する者が多く，特に女性では53.9%が選択している。次に男性は「2」が，女性は「4」と「2」が同じ比率となっている。（図29　x^2　(3) 値＝14.247，p＜.01）

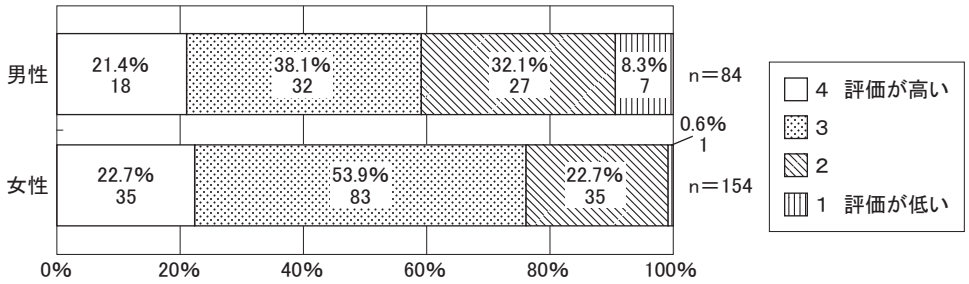

図29　地域の保育や福祉・介護に役立つ知識等を提供するところ

次に，「社会の様々な場面における指導的な人材を養成するところ」に関しては，男女ともに評価尺度で「2」が多く，次いで同様に「3」となっている。（図30　x^2 (3) 値＝9.044，p＜0.5）

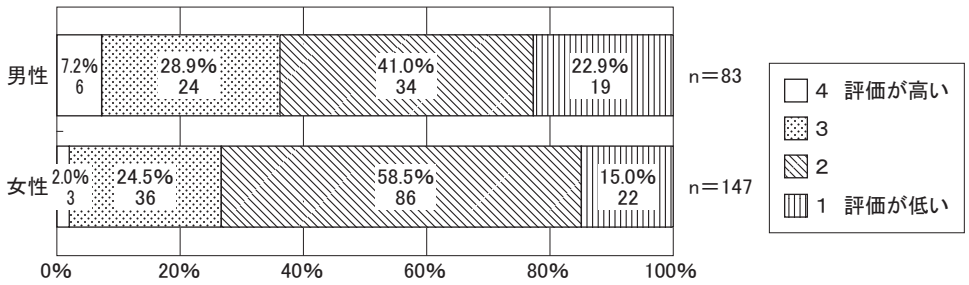

図30　社会の様々な場面における指導的な人材を養成するところ

さらに「地域住民の教養の向上に貢献するところ」については，男女とも評価度数が「2」が多く，保育者養成のイメージはあるものの地域貢献事業については，まだ十分には知られていない。（図31　x^2（3）値＝14.838，p＜.01）

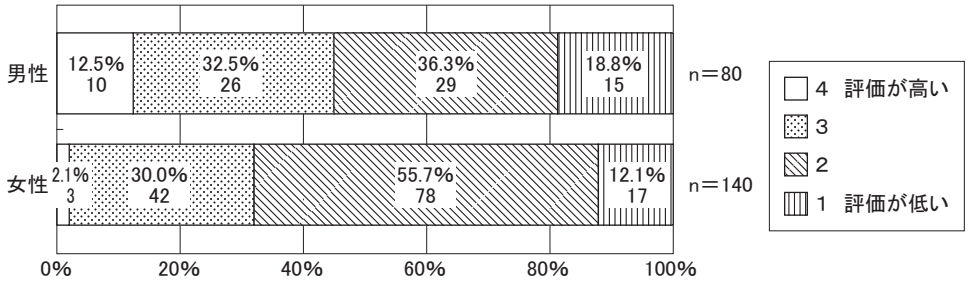

図31　地域住民の教養の向上に貢献するところ

Ⅳ　考　　察

以上のように，高齢クラブの会員には同居や近くに住む親族がおり，生活を年金で支えている人が多い。そしてその意識は外出支援や配食サービスの利用はまだ必要ないと考えるが，介護予防事業などへの参加意欲が高い。そして高齢クラブや親族内の交流，血縁関係を中心とした交流を望み，世代間交流についても自分が楽しめる範囲で関わろうとする意識が他の項目に比べて高い。総じて市内高齢クラブの人々は元気であり地域社会への目と意欲を持ち，健康に留意し生きがいを探して悔いなき人生を送ろうとしていることが分かる。

しかし，そこには見逃せない男女差があることにも着目したい。その第1は収入額の差である。年間収入200万円を境に女性ではそれ以下が約5割（男性2割）を占め，さらに収入（仕事）なしが8割以上を占めていることである。第2に女性は男性から介護者として期待され（約7割），本人は娘（約3割），夫（約2,5割）ヘルパー（約2割）に期待をかけることである。このことは女性の高齢期の問題を性別ライフコース問題として考える必要性を提示している。

そしてこうした意識の背景を踏まえて白梅学園大学についての意識を見ると，保育士をはじめとした福祉人材の養成機関として周知され，ある程度の評価は得ているが，地域との関わりについてはあまり明確ではないことがわかる。こうした実態を踏まえてみれば，今後は地域特性に合わせ地域ネットワークを生かした各種調査や住民との懇談，学習，交流等が地域と家庭支援の場には求められよう。

小平市は江戸時代より開墾地として開け，伝統的な農村型地域社会が形成されてきた。そして戦後の急激な人口流入による新旧住民の融和は学校教育，社会教育の場や機会を通

じて進み，そこでは今日の高齢女性たちの目覚しい活躍もあった。しかしながら全体的な地域の印象は現代的なイメージからは立ち遅れ，都市機能を十分持たせるまでには至っていない[1)]。今日，若者を中心として脱制度化の意識も見られる中で，家族の機能も対個人的なものからネットワーク化に象徴される対社会的な機能を含むものへと移行している状況の進展は，回答を寄せた高齢者たちにはどのように映っているであろうか。

閉鎖的な地域であればあるほど，家父長意識が残存する地域での嫁役割に代表されるような無言の重圧を，いかに生活の安定に結び付けるのかが問われてくる。高齢期の女性たちが自分の介護は娘に期待する意識はそうした家族や地域のありようが長く続き，嫁役割を忠実に守ってきたがために，嫁姑間の対立が生じ，あるいは嫁役割が通じない現実に遭遇し，親を見てきた娘がその間に入るようになったからではないだろうか。夫に介護者を期待しないのもその表れであろう。このようにこの地域では都市化に向かった過渡期の農村意識が支配し，男女の意識差が表面はどうであれ縮まってはいない。このことはとりわけ高齢女性の多くの課題，すなわち年収や職業の男女格差，女性の独居の高さは，周囲に親族がいるとはいえ厳しいものがある。高齢期の女性たちの生活支援は課題が多い[2)]。

しかしながら片や同市は玉川上水などの自然が豊富で公園の数も多く，住民の意識も中高年を中心として高く，地域差はあるが学校や公民館，地域センター等で培われたネットワークも生きており[3)] それらを取り入れた今後のまちづくりの発展が期待できる土地でもある。そして白梅学園大学が保育や介護等福祉系人材を養成する地元の大学として親しまれていることを踏まえてみれば，これらの人的，地理的条件を十分に生かしうる環境が周囲に整っているともいえる。その具体的な表れは小平西地区地域ネットワークの形成であり，大学にはソーシャル・キャピタルの橋渡しが期待される。それは具体的には介護や福祉，医療等の知識の伝達はもとより，世代間交流を目的として女性高齢者を中心としてライフヒストリーを語りあう場や，高齢者施設への訪問等の交流が学生達に限定されずに長いスパンで試みられること等であろう。地域住民の間に世代間の交流が様々な形で広がることでネットワークが活性化し，地域課題の解決へと向かうことになるのではないだろうか。

2010年末に出された「第3次男女共同参画基本計画」では「改めて強調している視点」として「貧困など生活上の困難に直面する男女への支援（第7分野）」が挙げられている。「単身世帯やひとり親世帯の増加，雇用・就業構造の変化，経済社会のグローバル化などの中で，貧困など生活上の困難について幅広い層への広がりがみられる。一方，相対的貧困率については，ほとんどの年齢層において男性に比べて女性の方が高く，特に高齢単身女性世帯や母子世帯等一人親世帯で高いという特徴がある。」と記されている。そして「こうした様々な生活上の困難の世代間連鎖を断ち切るためにも，女性の就業継続や再就職の支援」等を行うことが述べられ，高齢期に至るまでの女性施策の必要性が説かれている。そしてそのことは「男女共同参画を推進し多様な選択を可能にする教育・学習の充実（第

11分野)」において　ア　教育関係者の男女共同参画に関する正確な理解の促進，イ　初等中等教育の充実，ウ　高等教育機関における調査・研究等の充実，エ　社会教育の推進，オ　男女共同参画社会の形成に資する調査・研究等の充実」が具体的項目として示されている。中でもウの高等教育機関における調査・研究等の充実では「男女共同参画の正確な理解の浸透を図るため，ジェンダー研究を含む男女共同参画社会の形成に資する調査・研究の一層の充実を促す。また，それらの成果を学校教育や社会教育における教育，学習に幅広く活用し，社会への還元を促進する。」とされている。

さらに「地域・防災・環境そのほかの分野における男女共同参画の推進（第14分野)」の具体的施策項目として「ウ　地域ネットワークの構築の支援」が入っていることにも注目したい。「地域における政策・方針決定過程への女性の参画拡大を図るとともに，女性の自主的な活動を阻害しないように留意しつつ，男女共同参画の視点を踏まえた地域ネットワークの構築を図り，地域コミュニュティの再生を図る。」とある。地域の多彩な資源と住民のリーダーと専門家，そして自治体職員などがそれぞれの特徴や長所を生かしてプラットホームを形づくり，それまで取り残され，成し得なかった多くの課題の解決を地域福祉，地域教育の視点からも図る必要がある。それはハード面のみならず，地域に関わり生きてきた高齢者から多くのソフト面での可能性を学び，何が必要なのかを専門家集団を抱える大学が見極め，各主体間のずれを調整し，ジェンダーにまつわる無理解や無関心，ジェンダーバイアス等の壁を取り除いてゆく役割を果たすことが肝要である。

＜注＞

1) 山路憲夫「小平市を中心とする子育てネットワーク研究序論」『白梅学園大学・短期大学紀要』第43号　2007では子育て支援に関する小平市の現状と課題を述べ，児童福祉費の比率の低さをはじめとして保育料，保育所待機児童，延長保育等や子育て広場等の問題を指摘しているが，それは女性が働く為の条件が整っていないことを示している。

2) 草野篤子　森山千賀子　滝口真央　滝口優「地域ネットワークに関する調査研究―小平のソーシャル・キャピタルを考える―」『白梅学園大学・短期大学　教育・福祉研究センター年報』No.13　2008では今日の小学生を持つ母親への調査では家族の収入で生活している人が86.3%おり，今後もこの地域に住みたいとする人が56.3%，どちらでもよい人は34.2%で地域構築の課題が問われるとしている。また，保育園や学童保育等の状況から現在でも専業主婦ないしはパートの女性が多く，潜在的な就業意欲はあるものの，小学校低学年一人親の子どもの学童保育への入所が少ない旨等を井上恵子，草野篤子「子どもの遊びと生活に関する一考察」『白梅学園大学・短期大学　教育福祉研究センター研究年報』No.15　2010では指摘した。また，同市では女性と子どもに関する重点施策を掲げていることにも言及している。このことは，さらに高齢期を見据えた行政施策にも連なり，急務の課題であるだろう。

3) 自治会が顕在でNPOの発展が他に比べてやや少ない地域ではあるが，学校や公民館を核とした人々のネットワークは大きく張り巡らされている。コミュニュティ・スクールの活動もそうした

土壌の上に成り立っている。子どもや若者と関わる意識は顕在化しており，古き良きものを残した地域であるともいえる。なお，小平市や東村山市等，旧北多摩地域を中心として教育，まちづくり，子ども学のあり方について，大学での研究を蓄積してきたものとして『地域と教育』2000（第１号）～2011（第22号），『地域と子ども学』2009（第１号）～ 2011（第４号） 学校法人白梅学園　をあげることができる。

＜引用及び参考文献＞

テレンス・シーズマン「世代間交流のプログラムと実践の促進における大学の役割」『世代間交流国際フォーラム　世代間交流についての国際研究集会』ペンシルバニア大学　NPO法人日本世代間交流協会　信州大学（国際研究集会）2007　pp115

Seedsman, T.,（2007），Support Intergenerational Relationships：A Role for Universities, Proceedings Uniting the Generations：Japan Conference to Promote Intergenerational Programs and Practices & Post Conference：International Academic Meeting on Intergenerational Issues and Initiatives

Seedsman, T.,（2002），Older researchs：A new social policy for higher education. In J. Sillitoe, G, Gosling, J. Webb&S. Vance（Eds.）Assisiting research students from non-traditional backgrounds, Melbourne：HERDSA（vic）

草野篤子，金田利子，柿沼幸雄他『世代間交流学の創造』あけび書房　2010

草野篤子，滝口真央「人間への信頼とソーシャル・キャピタル－東京都小平市における研究－」『白梅学園大学・短期大学紀要』第45号　2009

滝口優，森山千賀子「社会的ネットワークとソーシャル・キャピタル」『白梅学園大学・短期大学紀要』第45号　2009

若本純子「老いと自己概念からなる中高年期発達モデルの作成と妥当性の検証」『白梅学園大学・短期大学紀要』第43号　2007

井上恵子「女性と公民館」『公民館　コミュニティ施設ハンドブック』日本公民館学会　エイデル研究所　2006

くさの　あつこ（社会福祉学，生活経営学）
いのうえ　けいこ（教育学，生涯学習）